

第2章 地域活性化G Pの内容と成果

本補助事業（地域活性化G P）は、地域活性化への貢献（地元型）について、学生の社会人基礎力、企画・提案力の開発と地域活性化への貢献を目指す補助事業であり、内容は以下のとおりである。

2.1 地域連携アドバイザー（長岡市等の担当者）との協力

本年度、取組に参加したチームは10ゼミナール（3，4年次）であった。各チームのテーマ選定にあたっては、各ゼミに事前に「長岡市総合計画」を配布し、それをもとに学生とゼミ担当教員の相談の結果決まったものである。テーマ選定にあたっては、3年生の場合、これまで「総合計画」を見たこともない学生も多く、総合計画により地域の問題点・課題、目指すべき方向を学習できたことは、学生の今後の学習・研究にも役立つものであった。各チームのテーマと概要は、参考資料5のとおりである。

各ゼミでは、アドバイザーになっていただいた長岡市の専門担当者にヒアリングをすることにより、その分野の抱える問題点や施策をより深く学習することができ、調査研究の具体化と絞込みを行った。

2.2 資料収集・分析法の学習

ゼミ担当教員、アドバイザー教員および地域連携アドバイザーの指導のもと、情報・データ収集技法（情報検索、インターネット活用）、統計分析技法（地域統計の読み方、表計算ソフトの応用）、社会調査法技法（アンケート、インタビュー）、レポート作成法、プレゼンテーション技法の学習を行った。これらの内容は、基本的には講義等によって行われているものではあるが、実際に自分たちで使うことにより、その応用力を身につけることができたと考えられる。

なお、専門的技法に関する講義資料については「学生による地域活性化提案プログラム－政策対応型専門人材の育成－平成19年度活動報告書」（平成20年3月、長岡大学）を参照されたい。

2.3 学生による資料収集

本年度は取組2年目ということもあり、昨年度と同一テーマで取組を行っているゼミについては、研究の蓄積がみられた。一方で、今年度から参加したゼミや新たなテーマに取り組んだゼミでは、フィールドワークを優先させなければ年度内の完成が難しいという実情もあり、資料収集に十分な時間をかけることができなかったようである。

しかしながら、安易にインターネットで検索して資料を収集する傾向が強いなかで、資料収集の大変さを理解できたことは評価できる。

2.4 学生による資料分析

調査資料、統計資料の分析を目指したこの項目については、資料収集の度合いによって成果に違いがみられるが、後述するアンケートのまとめやヒアリングのまとめなどの整理については、一定の進歩が見られる。

2.5 調査研究ポイントの整理

地域連携アドバイザーおよび教員に紹介された資料をもとに、次段階のフィールド調査のポイントを学生が整理した。実際にフィールド調査を実施する直前の段階であり、これまで、紹介された資料や総合計画を漫然と見ていた学生も自分の担当を意識し始めた頃でもある。

2.6 地域連携アドバイザー（関係団体の職員等）の委嘱・レクチャー

長岡市の地域連携アドバイザーおよび担当教員の指導のもと、課題および今後の方向性について検討を実施した。取組に初めて参加した学生は、ヒアリングでもアンケートでも比較的簡単にできると考えていたようであるが、先輩からのアドバイスやレクチャーを通じてその大変さを十分に認識したようである。

ヒアリングでは、実際にどのような団体があるのか、誰に聞くことが有効か、何をどう聞くべきなのか、聞くためには自分たちも最低限の知識を持っていなければならないことなど、多くを学ぶことができた。また、アンケートを実施する場合の設問項目の作り方によるバイアスの問題、回収率が望めるかどうかの問題、名簿の入手可能性の問題、費用の問題など、多くを学ぶことができた。

ヒアリング先やアンケートの協力を依頼するにあたって、あわせて地域連携アドバイザーにもなっただき、今後も指導いただけるようお願いした。

2.7 ヒアリングないしはアンケートの実施

ヒアリング、アンケートを実施することによって、学生の力は目覚しくアップした。とりわけ、現場見学・体験をしたゼミでは、その問題に関する認識が大きく変わったと思われる。研究成果の学生所感などを参照されたい。

2.8 フィールド調査のまとめ

ゼミ担当教員およびアドバイザー教員の指導のもと、フィールド調査のまとめを行った。当初、まとめがなかなかうまくいかず、苦勞した学生もみられたが、取組経験者からのアドバイスやいくつかのひな形をもとに、参加学生が手分けしてまとめをすることができるようになった。

2.9 提言の作成

提言の作成は、ゼミ担当教員の指導のもと行われた。提言を作成するにあたって、学生は調査内容を再度精査する必要にせまられ、知識の不足している部分については地域連携アドバイザーに再度ヒアリングを実施した取組もあった。

資料調査、フィールド調査を通じて得た知識をもとに、学生間で活発な意見交換がなされた。提言を学生が協力して作成することにより、企画・提案力も向上したと思われる。

2.10 プレゼンテーション資料の作成

今年度は中間発表会を実施したため、学生は2度プレゼンテーション資料を作成する

ことになった。中間発表会（参考資料6参照）ではプログラム推進委員や地域連携アドバイザーからテーマに対する焦点の当て方、今後の方向性についてなど、貴重なご意見、ご指摘やアドバイスをいただき、最終発表会の資料づくりに役立てることができた。

このプレゼンテーションソフトを用いた発表資料の作成を通して、学生の資料作成能力と発表力は格段に向上した。

2.11 成果発表会の実施

平成21年2月26日に、ホテルニューオータニ長岡・NCホールで、「平成20年度 長岡大学 地域活性化G P成果発表会」を実施した（参考資料7及び参考資料8参照）。学生にとって、200人を超える会場で発表するという経験は非常に有意義なことであった。また、3年生の場合には、就職活動に非常に役立つ経験となった。

発表会は、アンケート調査によれば、非常に好評であった。アンケート結果は、第4章を参照されたい。

2.12 最終報告書の作成

最終報告書の作成は、ゼミ担当教員の指導のもと行われた。なお、報告書作成にあたっては、プログラム推進委員、地域連携アドバイザーおよびアンケート協力機関やヒアリング先の担当者に内容確認をするよう指導し、それによって、学生は多くのことを学ぶことができた。この段階で、社会人基礎力がかなりついたと思われる。

なお、各ゼミの取り組み内容と報告書（提言）については、「第Ⅱ部 学生による研究成果報告」を参照されたい。

2.13 設備備品の充実

本取組はフィールド調査が必要不可欠であり、学生自身が調査活動を実施し、資料作成を行い、成果発表を行うものである。したがって、昨年度購入したパソコン、プロジェクタ、携帯型スクリーン、デジタルカメラ、ICレコーダーに加え、取組参加数が3チーム増加したこともあり、新たにパソコンとプロジェクタの充実を図り活用した。

設備備品は複数の取組の共同利用になるため、その管理、貸し出しルールをしっかりと守ることが必要であるが、学生は自覚を持って対応できるようになった。

2.14 プログラム推進協議会の開催

プログラム推進協議会については、3回開催した。7月に取組み全体の説明・検討を行い、12月に中間報告を行い、3月に取組み終了後の報告・検討を行った。いずれも地域連携アドバイザーから有益な意見をいただいた。

2.15 取組に関する学内外への情報発信

取組に関する学内外への情報発信については、ホームページの充実（本取組の紹介）、本事業案内冊子（ブックレット）の刊行、事業案内パネルの作成・展示を行った。

また、10月には学園祭で取組を題材にしたシンポジウムとパネル展示会を実施した。2月には「平成20年度 長岡大学 地域活性化G P成果発表会」を実施した（参考資料7

及び参考資料8)。2月には経済産業省主催「社会人基礎力育成グランプリ2009予選大会(参考資料9)」に参加するとともに、3月には財団法人大学コンソーシアム京都主催「第14回FDフォーラム(参考資料10)」で本取組の紹介を行った。

2.16 補助事業関連業務体制の強化

補助事業関連業務体制の強化については、昨年に引き続き2名の補助事務員(1名継続、1名新規)を雇用し、「現代GP室、地域活性化GP担当室」で業務を推進した。継続事務員がいたために、ヒアリングやアドバイザーとのコンタクトについて効率よく取り組めたことに加え、学生も気軽に様々なことを相談できるようになったため、各取組の実質ゼミ担当教員が3名の体制をとることができた。それにより、学生の社会人としてのマナーは非常によくなったと感じられる。

2.17 教授法の開発・整備

教授法の開発・整備については、取組すべてを対象として、テーマ設定から報告書の作成発表までのステップをまとめた事例集を作成した。(第3章参照)。